葵の祈祷所 ②

紀伊徳川家と高尾山

明治大学博物館　外山　徹

徳川氏関東入国とその前史

窮状を訴える高尾山八世源實による薬師堂再建勧進帳

紀伊徳川家との関わりをテーマとする本連載であるが、まずはその前史に遡ってから始めたいと思う。天正一八年（一五九〇）は八朔（八月一日）の打ち入りとして知られる徳川家康の関東移封以前、同地は後北条氏の治世下にあった。そして、高尾山薬師堂は北条氏の祈祷所を勤めていた。

後北条氏と高尾山

北条氏との関わりが知れる初めは、永禄三年（一五六〇）付の北条氏康による、祈祷依頼と寺領寄進の判物であるが、これは上杉謙信（当時は長尾景虎）の大遠征を控えての戦勝祈願と評価されている。越軍は北関東を通過する際に、後北条の圧力を受ける勢力を吸収して空前の大軍に膨れ上がっていった。北条氏は本拠小田原城を攻囲される危機に陥り、高尾山周辺も越関連合軍に制圧されることになる。しかし、越関軍の先鋒太田資正（かの太田道灌のひ孫）と謙信は、北条氏の祈祷所と知ってか知らずか、高尾山に対して軍勢による乱暴狼藉を禁ずる制札を発給している。

謙信は鎌倉鶴岡八幡宮で関東管領職を継ぐ儀式を済ませると、小田原城の囲みを解いて退却に移る。危機を脱した北条氏にとって高尾山に対する信任は厚く、以降、多摩地域を領有した北条氏照発給の文書が、度々残るようになる。氏照は越関軍と交戦の最中である、永禄四年三月と推定される時期に寺領を寄進している。天正三年（一五七五）の暮れには、翌春予定されている居開帳において参詣者による狼藉を禁ずる制札を発給しているが、当時すでに信仰の地としてよく知られた存在であったことを推測させる史料である。寛政二二年（一八〇〇）に改修された唐銅五重塔は、元亀元年（一五七〇）に北条氏から寄進されたものとされ、また、元亀二年には、家臣の野口照房が銅製の釣燈籠を寄進したという記事が江戸後期の地誌に残る。これらの寄進は後世の記録によるものだが、北条氏の帰依を得ていたということを、当時の薬王院や地誌の著者は重視していたということだろう。

北条氏が高尾山を重視していたもう一つの理由は、高尾山の北の尾根続きである小仏峠が軍事上の要衝であったことだろう。かつて小仏峠を破られ滝山城を搦め手から攻められたことのある氏照は、小仏峠に程近い元八王子の地に信長の安土城をモデルとしたと言われる、壮大な規模の石垣群を備えた八王子城を築いた。小仏谷を挟んで高尾山とは指呼の間である。

氏照は高尾山の森林の盗伐者は死罪に処するなど厳重に取り締まった。森林は軍勢を隠すブラインドであり、秀吉の来攻に備えて高尾山から伐り出された資材で小仏関の防備が強化されたこともあった。しかし、小田原の役に際し、氏照は一族の本拠小田原城に籠り、城主不在の八王子城は前田利家・上杉景勝の軍勢の攻撃によりわずか一日で落城してしまった。後世の地誌の記事によるが、その時高尾山主であった八世源實は城中で他の祈祷所寺院の僧侶とともに敵方調伏の祈祷をおこなっていたという。

家康の関東入国

徳川氏は新田源氏の流れをくみ、上野国（群馬県）を本貫の地とするものの、家康にとって関東は未知の大地であっただろう。この移封は終結したばかりの小田原の役の論功行賞によるものではあったが、滅んだとは言えかつて後北条氏が君臨した地には実際帰農して潜伏する残党勢力もあったし、周縁部には佐竹や里見などの油断ならぬ勢力が蟠踞していた。経済的に恵まれた駿遠三（愛知県西部から静岡県中部にかけての地域）から、未開の関東への移封は左遷以外の何ものでもなかった。

北条氏亡き後、高尾山の歴史はしばらく空白となる。この間は、家康の配下として八王子宿の整備をはじめ新たな領国経営の基礎を築いた代官頭大久保長安による高尾山の竹木伐採を禁ずる配下の代官に宛てた書状が残るくらいである。腑に落ちないのは、この文面は寺院によく宛てられた竹木伐採禁止の制札という体裁を取るものではないことである。よってこの史料から高尾山自体の動静を知ることはできない。その書面が薬王院に残ったということは、地元の代官との間に何らかの交渉はあったものと考えられるが、書面からはただ竹木伐採の禁止が伝わるのみで、その意図するところは寺領の保護なのか、単に森林資源を確保することなのか不明である。

腑に落ちないことと言えば、家康は関東入国翌年には武蔵御嶽神社（青梅市）、六所宮（大国魂神社・府中市）、王子権現（北区）、寺院も宝生寺（八王子市）、大善寺（同）、大悲願寺（あきる野市）に寺社領を寄進しているが、高尾山薬師堂はこれらのリストから洩れている。薬王院の寺領が徳川将軍家によって安堵されるのは慶安元年（一六四八）と、半世紀以上の後のことになる。なぜだろうか。八王子城で祈祷をおこなったという高幡不動、青梅金剛寺もこの年に寺領安堵を受けていることを考えると、小田原の役における敵対行為が理由とも考えにくい。

江戸初期の荒廃

一方、気になるのは八世源實の署名による薬師堂再建の勧進帳の伝来である。文字通り再建の費用を募る文面であるが、その記事は衝撃的である。

今一院に僧四・五口あり、居諸送り難く
（現在、一棟の堂舎に四・五人の僧侶がいるが生活を送り難い状態にある）
諸木満々として八木すでに無し、葉を貪って朝の飢えを慰め、水を飲んで夕のつかいに充つ
（木々の繁るにまかせ、米はすでにない。果実や水でかろうじて朝夕飢えをしのいでいる）
草葉を綴て衣となし、茅萱を編んで筵となし、
（草や木の葉を綴って衣とし、茅萱を編んで敷物としている）
なかんずく本尊は雨に曝され、烏鴉の屎尿に汚れ、鳶鴿蹂躙して傾く、終に鍋・釜の薪となるべきこと悲しむに余りあり、歎くに極まりなし
（ことに堂を失った本尊は雨に打たれ、カラスの屎尿が落ち、トビ・ハトの群れが止まり木にして傾いている。終には煮炊きの薪とせざるを得ないことは悲しむに余りあり、歎くに極まりない）

何ということか。八世源實が住持した時代―慶長五年（一六〇〇）に隠居するまでの在住二四年は、後世の伝ゆえ若干の前後はあるかもしれないが、おおよそ後北条の治世下から家康が関東に入ってからしばらくという時期である。後北条の時代にこのような窮状は考えにくく、この惨状が訪れたのは八王子城落城以降と推測される。この時のことは後に再興された鐘の銘に「図らずも世の不平に遇って」と記されるのみでその理由は定かではない。ひょっとすると家康による寺領安堵が無かったのはこの荒廃が理由なのかもしれない。

この後、薬師堂及び周辺の伽藍の再建が成るのは一〇世堯秀晋山の後、寛永年間（一六二四～四四）を待たねばならなかった。